田原坂

年刊
Tabaruzaka
Vol.5

特集 会津と熊本

会津戦争。そして西南戦争

似て非なるもの、
二つの籠城戦

遠くて近い―縁―

さうま人みよや東の大丈夫か

さけはく太刀はときか鈍きか

新しく生きよう。
NEO ONE
KUMAMOTO

©樫木成香

会津と熊本

会津戦争。そして西南戦争

さつま人　みよや東の大丈夫か
さけはく太刀は　ときか鈍きか
元会津藩若年寄　山川　浩

戊辰戦争と西南戦争は密接に関係する。その連続性と非連続性が特徴的であり、加えて関係する人たちの生き様がドラマチックである。

戊辰戦争で戦った両軍の諸将が、西南戦争では敵味方が入れ替わり、旧幕府軍の元東北諸藩士は新政府側で西南戦争に従軍し、ここに会津白虎隊士や二本松少年隊士の生き残りが参戦したという。

旧会津藩士の薩摩に対する思いは格別で、会津人柴四朗は弟五郎へ「今日薩人に一矢を放たざれば、地下にたいし面目なしと考え、いよいよ本日西征軍に従うため出発す」と書き送った。五郎も「芋（薩摩）征伐仰せ出だされたりと聞く、めでたし、めでたし」と記した。一方、西郷隆盛の戊辰戦争後の山形庄内藩への寛大な措置は、伴兼之、榊原政治の二少年の私学校入学、西南戦争従軍へとつながる。

西南戦争における士卒は、政府軍では徴兵のほか士族兵もいたが実戦経験は乏しく、薩摩軍の実戦経験者は城下士族で四割程度、外城士族では一、二割ほどだったとされる。軍制をみると、全国一律の洋式軍制の採用契機は戊辰戦争で、新式銃の採用で命中精度と射程距離が大幅にのびたことから、戦法が密集隊形での一斉射撃から散開での散兵射撃が主流になったとされる。西南戦争ではより新式の後装スナイドル銃が主用小銃となり、統一された洋式軍服の政府軍は、近代軍隊を強く印象付けた。

戊辰戦争は完全な銃砲戦であった。西南戦争も基本は銃砲戦であるが、特に前半では「抜刀攻撃」が戦果を上げ、重要な戦法として位置づけられた。近代戦法としては後退したといえるが、西南戦争を特徴づける一面といえる。

戊辰戦争が明治維新の大きな画期となり、西南戦争は維新の終わりを告げた。明治維新は戦争に始り、戦争に終わった激動の時間だった。戊辰と西南、大きな犠牲を払った二つの内戦は、近代国家日本が大海に漕ぎ出す号砲であった。

【表紙】■強敵現る■

新キャラクター　窪田征巳郎（くぼた・せいしろう）元会津藩白虎隊士中二番隊。植木口警視隊一番小隊三等巡査、会津伝一刀流溝口派の遣い手。三月一四日抜刀隊の一員として七本柿木台場切込みに向かう。征巳郎、一〇年ぶりの実戦に聞こえるのは自身の鼓動のみ。時に寒風飄々肌を剪る。

（画　樫木成香）

河上　彦斎　Kawakami Gensai

会津戦争とは

慶応四年（一八六八）、会津藩内における東北戊辰戦争の最終段階の戦い。薩摩と長州を中心とする新政府に、朝敵とされた会津藩。新政府軍は会津に進攻し、八月二一日要所母成峠を突破、旧幕府軍は会津城に籠城したが、奮戦空しく九月二二日に開城となる。会津藩は庄内藩とともに最後まで戦った。

会津藩兵力約七〇〇〇人のうち、戊辰戦争全体で会津藩の戦死は二五五七名。次いで仙台藩八三一名、二本松藩三三四名なので、会津藩の犠牲者がいかに多かったかわかる。ちなみに新政府軍の一員として、いくつかの戦闘に参加した熊本藩は一〇六五人出兵して、戦死は二〇名である。

戊辰戦争と西南戦争比較

従軍した主な人物の戦時年齢

明治元年 (1868)　明治 10 年 (1877)　明治 27 年 (1894)　明治 37 年 (1904)

【薩摩軍】						
西郷　隆盛	（薩摩）	1827 ～ 1877	41	50 歳没		
篠原　国幹	（薩摩）	1836 ～ 1877	33	42 歳没		
村田　新八	（薩摩）	1836 ～ 1877	33	42 歳没		
桐野　利秋	（薩摩）	1838 ～ 1877	31	40 歳没		
永山　弥一郎	（薩摩）	1838 ～ 1877	31	40 歳没		
池上　四郎	（薩摩）	1842 ～ 1877	27	36 歳没		
別府　晋介	（薩摩）	1847 ～ 1877	22	31 歳没		
辺見　十郎太	（薩摩）	1849 ～ 1877	20	29 歳没		
【政府軍】						
有栖川宮熾仁親王		1835 ～ 1895	33	42	60 歳没	
川路　利良	（薩摩）	1834 ～ 1879	34	43		
谷　干城	（土佐）	1837 ～ 1911	31	40	57	67
樺山　資紀	（薩摩）	1837 ～ 1922	31	40	57	67
山縣　有朋	（長州）	1838 ～ 1922	30	39	56	66
野津　道貫	（薩摩）	1841 ～ 1908	27	36	53	63
大山　巌	（薩摩）	1842 ～ 1916	26	35	52	62
西郷　従道	（薩摩）	1843 ～ 1902	25	34	51	
山田　顕義	（長州）	1844 ～ 1892	24	33		
乃木　希典	（長州）	1849 ～ 1912	19	28	45	55
児玉　源太郎	（長州）	1852 ～ 1906	16	25	42	52
佐川　官兵衛	（会津）	1831 ～ 1877	37	46 歳没		
山川　浩	（会津）	1845 ～ 1898	23	32	49	
藤田　五郎	（新撰組）	1844 ～ 1915	24	33	50	60
			戊辰戦争	西南戦争	日清戦争	日露戦争

戊辰戦争

場　所	京大阪から東北一帯、北海道
期　間	慶応 4 年（1868）1 月鳥羽伏見　～　明治 2 年（1869）5 月函館 約 17 か月
動員兵力	旧幕府軍 5 万人　新政府軍 12 万人　計 17 万人
戦死者	旧幕府軍 8700 人　新政府軍 5000 人　計 14000 人

西南戦争

場　所	南九州を中心とした九州一帯
期　間	明治 10 年（1877）2 月熊本川尻　～　9 月鹿児島城山 約 7 か月
動員兵力	薩摩軍 5 万人　政府軍 6 万人　計 11 万人
戦死者	薩摩軍 6800 人　政府軍 6900 人　計 14000 人

◆鬼官兵衛　阿蘇の地に散る

旧会津藩士佐川官兵衛。戊辰戦争では緒戦の鳥羽・伏見の戦いから各地を転戦し、その抜刀切込みと阿修羅のごとき形相から、「鬼官兵衛」と恐れられた。

会津籠城戦では、官軍の包囲を突破して会津への糧道を確保するなどの活躍をみせ、維新後は警視庁に出仕。西南戦争では豊後口第二号警視隊副指揮長兼一番小隊長として阿蘇方面の戦闘に参加した。南阿蘇村黒川での戦闘において被弾、戦死した。

《辞世の句》

君が為
　都の空を打ちいでて
阿蘇山麓に身は露となる

◆「会津復権」にかけた男　山川浩

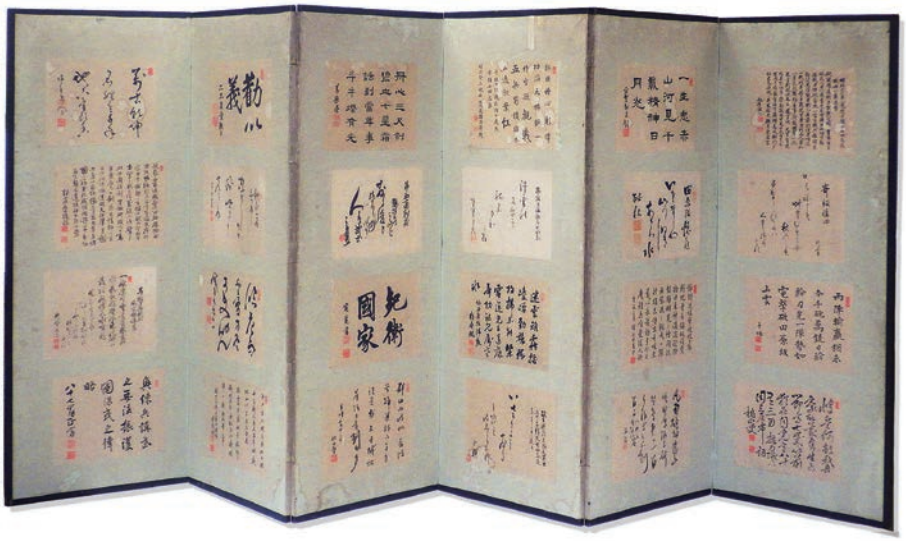
戊辰戦争では会津藩若年寄として、西南戦争では陸軍中佐として活躍し、後に陸軍少将、貴族院議員に栄進する人物、山川浩。

戊辰戦争日光口の戦いでは谷干城が率いる部隊を相手に好戦し、会津戦争では包囲された会津城に伝統芸能「彼岸獅子」を先頭で舞わせながら、官軍を欺いて入城するという離れ業を演じた。

廃藩置県後、山川の指揮官としての能力を買った谷の声かけで陸軍に出仕する。西南戦争…山川は衝背軍を指揮し、包囲網を突破して籠城する谷を助け、その恩を返した。

彰功帖（しょうこうちょう）

警視抜刀隊三等少警部として西南戦争に従軍した旧会津藩士　田村（丹羽）五郎は、従軍者の顕彰と忠魂慰霊のため、明治一六年三月の戦没者七回忌に向け、各界著名人に漢詩・和歌・書画などを募り、三五〇余の色紙を靖国神社に奉納した。明治二四年に「彰功帖」として刊行。



彰功帖を屏風に貼ったもの（西南戦争資料館蔵）

会津軍記　会津藩降伏図（個人蔵）

二つの籠城戦

似て非なるもの

なぜ会津城は開き、熊本城は落ちなかったのか。その間一〇年足らずだが、江戸時代と明治時代では城に対する考えが本質的に異なる。時代の相違―個と全体―の表象である。

会津城に籠城したのは、幼少から城を仰ぎ見ていた会津藩士である。城は藩主が御座する大事な場所であり、唯一無二の存在、自身の存在そのもの、藩そのものである。一方、熊本城に籠城したのは各地から集められた鎮台兵。城は全国に数ある軍事施設の一つに過ぎず、城に対する特別な思いはない。

会津では会津盆地への敵の侵入を防ぐことができず、準備もできぬまま攻城軍は増え、援軍もなく、錦の御旗に抗することができなかった。しかし、熊本城には天皇の後ろ盾があった。開戦前から籠城準備は進められ、援軍も近く、逆に包囲兵は減っていった。つまり、結果として敗者の会津城、勝者の熊本城であり、同じ籠城戦とはいえその背景や過程・結果は異なる。江戸が明治に敗北したともいえるだろう。奇しくも、戦時における天守閣の有無が、近世城の役割という点で二つの籠城戦を象徴しているともいえる。

戊辰会津戦争・会津城籠城戦概要

日　時　慶応4年(1868)8月23日～明治元年(1868)9月22日（旧暦、明治改元9月8日）
※新暦では10月8日～11月6日

日　数　30日間

籠城人数　5235人
会津藩士とその家族、うち士卒は約2500人

攻城人数　約2000～3000人　新政府軍の薩摩・長州・土佐・大垣藩兵など。その後順次増加した。

主用火器

◆守城（会津藩）
大砲：51門　小銃：2845挺（ゲベール銃など開城時）

◆攻城（新政府軍）
大砲：約50門（四斤山砲、ボートホウイッツル砲、アームストロング砲、パロットライフル砲、20ドイム臼砲、和砲など）　小銃（スナイドル銃など）

攻城軍の主要砲台
小田山（会津若松城までの距離　西方約1350 m）

西南戦争・熊本城籠城戦概要

日　時　明治10年（1877）2月22日～4月14日

日　数　52日間

籠城人数　約3300人　政府軍熊本鎮台約2800人、東京警視隊約480人、県官など。

攻城人数　約9000～10000人　薩摩軍　正面軍約2500人、背面軍約3000人、予備隊3400人など。2000～4000人程度まで減少。

主用火器

◆守城（熊本鎮台）
大砲：26門（四斤山砲、四斤野砲、12・20ドイム臼砲）小銃（スナイドル銃、エンフィールド銃、スペンサー銃）

◆攻城（薩摩軍）
大砲：約10門（四斤山砲、20ドイム臼砲、ブロードウエル山砲）小銃（スナイドル銃、エンフィールド銃、スペンサー銃、ウエストリーリチャーズ銃）

攻城軍の主要砲台
花岡山　熊本城までの距離　東方約2000 m

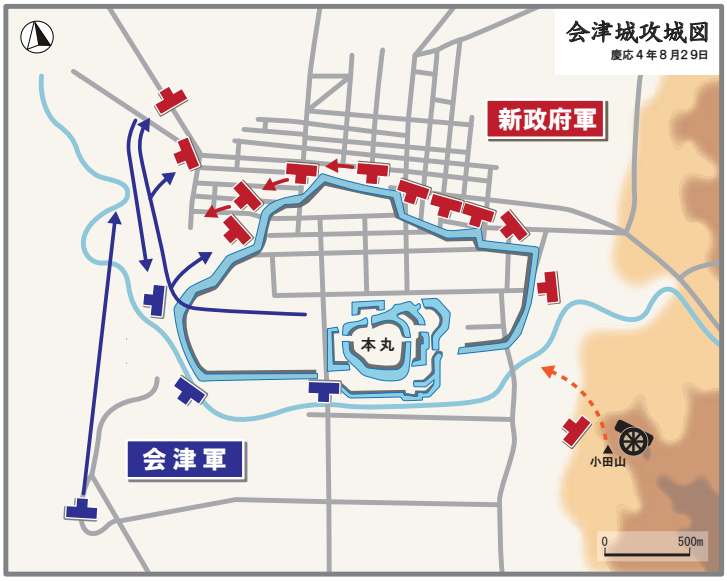
アームストロング砲弾

イギリスのアームストロングが開発した後装式施条砲。佐賀藩のもつ６ポンド砲２門が戊辰戦争で実践投入されたと記録にある。（個人蔵）

ブロードウェル砲弾

ブロードウェル式緊塞具を備える。日本には口径６㎝と７㎝が入っていて、西南戦争では、少なくとも口径６㎝のほうは実践投入された。（熊本博物館蔵）

小田山砲台跡から会津城を望む



花岡山砲台跡から熊本城を望む

遠くて近い

会津と熊本 ―縁―

◆加藤忠広の妻が立てた蒲生秀行の供養塔

蒲生氏郷の次代秀行の娘で、徳川家康の外孫にもあたる崇法院。加藤忠広の正室で、彼女が父秀行の七回忌に立てた供養塔が熊本市中央区横手の安国寺にある。

忠広は改易となって出羽庄内に配流されるが、崇法院は同行せず、京都で生涯を送ったそうだ。

◆五高の名物教師　秋月悌次郎

明治時代の第五高等学校に、小泉八雲が「神のごとき」と評した老教師がいた。秋月悌次郎。元会津藩士である。

東京大学の前身である昌平坂学問所の寮舎長を務めた秀才で、幕末、会津藩が京都守護を任じられた時には公用方として、戊辰戦争では副軍事奉行として藩の指揮をとった。会津籠城戦では土佐藩と調停し、困難な降伏・開城を取り仕切った。

明治二三年、彼は五高の漢文教師となる。サムライへの憧憬と、柔和な人格への尊敬から、八雲の目には秋月が「神」と映ったのだろう。

◆新島八重と徳富蘇峰

会津戦争ではスペンサー銃を持って奮戦した新島八重。彼女の夫、新島襄は徳富蘇峰の恩師だった。

彼女の服装や襄への奔放な接し方を「鵺のような女」と評して、八重を嫌っていた蘇峰だったが、襄の死後、それまでの非礼を詫び和解する。年間二〇〇〇円の貴族院議員歳費を封を切らずに送り続けるなど、八重を師である襄の「形見」として支えた。「徳富さんはまことにおどろく方です」。八重は涙を浮かべて語ったという。

◆石光真清と柴五郎

西南戦争下の人々を活写した『城下の人』の作者石光真清は、柴五郎宅に寄宿し、その薫陶を受けている。柴は会津出身だが後に陸軍大将に栄進し、北清事変では国際社会からも賞賛を浴びた人である。

石光は『ある明治人の記録―会津人柴五郎の遺書』を著した。「時移りて薩長の狼藉者も、いまは苔むす墓石のもとに眠りてすでに久し。恨みても甲斐なき繰言なれど…ただ悔しきことかぎりなく、心を悟道に託すること能わざるなり」と明治国家のために尽力しつつも胸にあった会津人柴五郎の心情が吐露されている。

「城下の人」初版本と柴五郎のサイン（熊本市文化振興課蔵）

◆安場保和と安積疏水

安場保和―横井小楠の門下生で、勝海舟をして「小楠の弟子といえる者は安場ぐらいなものだろう」と言わしめた旧熊本藩士である。

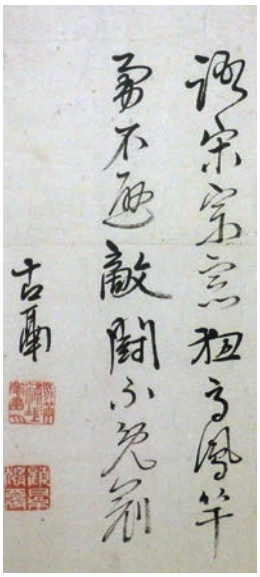
安場は明治五年、福島県令となり人材育成・殖産興業の推進に尽力する。彼の業績は多岐にわたるが、特筆されるのは日本三大疏水のひとつ安積疏水工事の端緒を開いたことである。周辺地域は、それまでの原野から一大穀倉地帯へと生まれ変わった。

戊辰戦争後の停滞期、福島の人心に寄り添いながら、地域振興を果たした安場の業績は大きい。

◆山川健次郎が語る古屋昔陽

熊本の儒学者古屋昔陽は、江戸に私塾を開いて名声を得た後、熊本の教育制度を知った会津藩に招聘され、藩校日新館の創立に携わった。

後に、山川浩の弟で白虎隊出身、九州帝国大学初代総長を務めた山川健次郎が、済々黌創立二五周年を祝し、「私は会津の生まれで、藩校日進館は肥後の古屋昔陽先生によって建てられ、私たちは肥後的教育を受けた。江戸で他藩の武士は大道せましと闊歩していたが、肥後藩士は不遜の風無く、よく礼儀を重んじていた。」と、熊本の優れた点を取り入れた会津藩校教育を受けたことを誇りとする心境を語った。



古屋昔陽の書（個人蔵）

新々刀　刀　表銘　肥後住同田貫宗廣作　裏銘嘉永三年十月日　刃長七三センチ（個人蔵）

新々刀　刀　無銘（十一代会津兼定）　刃長六九・三センチ（個人蔵）

十一代兼定は、江戸時代から明治まで続いた会津兼定のラストランナーじゃな。一方の同田貫は肥後国菊池の同田貫（地名）を本拠地に、永禄頃から活躍した肥後刀工の一群でござる。

きなことおじさん　刀の話

きなこ　25 歳　刀剣女子、刀は「江雪左文字」推し。

おじさん　62 歳　きなこの親戚のおじさん

き　こんにちは。今回のテーマは会津と熊本だけど、刀剣には直接関係はないみたいなの。

お　ばってん、会津の容保公は肥後守たい。肥後守といえば小刀で有名ばい。

き　えーと、小刀ではなくて、日本刀の話です。会津には五鍛冶六家といって、古い伝統の刀匠がいたの。古川・下坂・三善・中条・鈴木の各系統があるみたい。

お　古いて、いつ頃からや。

き　最も古いのは、室町時代の後期に岐阜県の濃州関の兼定が、会津守護大名の葦名氏に仕えたのが始まり。その後、古川兼定系は蒲生、上杉、加藤、松平氏に仕えて、幕末明治まで繁栄したそうよ。

お　ほー、そうにゃ永んかね。

き　近世細川家二代の細川忠興（三斎）公の愛刀は室町時代の「和泉守兼定」で、　拵は「歌仙拵」。美しくて品があって、落ち着いた雰囲気のあるお洒落な拵だわ。

お　他に誰が持ったつだろか。西郷隆盛の愛刀も庄内藩公から拝領の「和泉守兼定」だったらしかぞ。

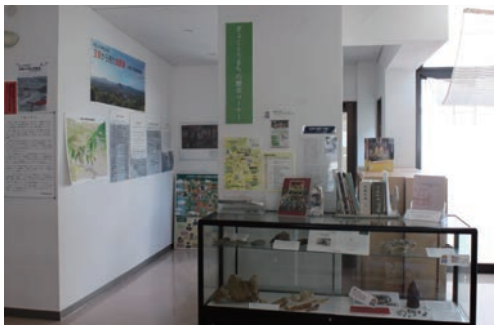
き　そういえば、新撰組副長土方歳三も藩主松平容保公下賜の「11 代和泉守兼定」だわ。後年、東北初の陸軍大将になった会津人柴五郎にも贈刀されたのよ。特徴は重ねが厚く鎬高く、元と先の幅の差が少ない反りが浅いお姿で、刃文の直刃がきれいなの。

お　となると、細川の殿さんも、西郷どんも、土方副長も会津に関わりのある「兼定」ば持っとんなさったちゅうこったいね。ずーっと会津に心ば寄せとらしたっだろ。恐るべし、「兼定」つながり。やっぱ、会津と熊本、戊辰と西南は深か因縁のあるとたいね。

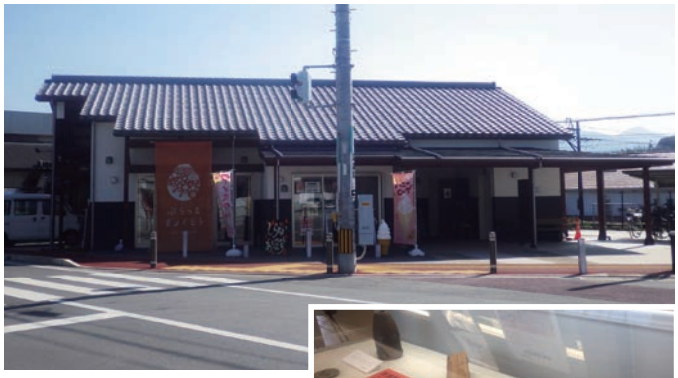
年刊 田原坂 2018年[Vol.5] 2020年3月第3版
田原坂西南戦争資料館展示案内
発行 熊本市文化振興課

連携事業の紹介ー玉東町の取り組みー

◆熊本市と玉名郡玉東町は、ともに西南戦争遺跡の周知・啓発に取り組んでいます。



▲玉東町中央公民館の資料展示



▲西南戦争歴史講座（玉東町中央公民館）

▲ JR 木葉駅前「ぷらっとぎょくとう」の資料展示

未来に誇る、熊本の軌跡。
熊本遺産 KUMAMOTO HERITAGE

田原坂西南戦争資料館 利用案内

■開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで） ■休館日 12月29日から翌年1月3日まで

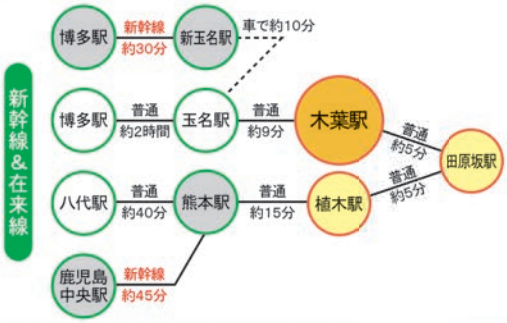
■入館料 一般（高校生以上）個人300円 団体（20名以上）240円
小・中学生 個人100円 団体（20名以上） 80円

ただし乳幼児、障害者手帳をお持ちの方、熊本市、鹿児島市、福岡市、北九州市に居住する65歳以上の方（証明できるものを提示）と同市内の小・中学生（名札か生徒手帳提示）等の入場は無料です。

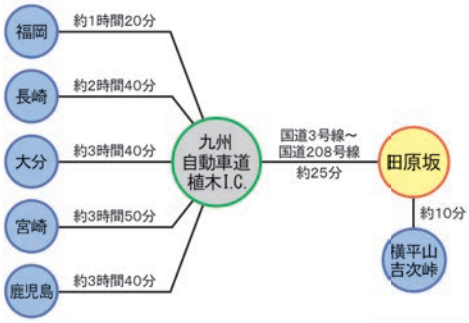
交通案内

2022年7月訂正

ＪＲをご利用の場合



自動車をご利用の場合



お問い合わせ

熊本市文化振興課植木分室
〒861-0195 熊本市北区植木町岩野238番地1
☎096－272－0551

熊本市田原坂西南戦争資料館
〒861-0163 熊本市北区植木町豊岡858番地1
☎096－272－4982

雑誌1877-03 定価0円
1002190924
030420